

King Learにおける狂気の導き手一真実

川上, 慶子
九州大学大学院人文科学府 : 修士課程

<https://doi.org/10.15017/6790331>

出版情報 : 九大英文学. 48, pp.41-52, 2005. 九州大学大学院英語学・英文学研究会
バージョン :
権利関係 :



King Lear における狂気の導き手—真実

川上 慶子

序

William Shakespeare の *King Lear* は、一言で述べるなら「敬愛すべき、偉大なる王」リアが、自らの愚行が原因で自分のアイデンティティを失い、狂気に陥りながらも失ったものを求め、その果てに命尽きる悲劇である。その悲惨さは嵐の荒野をさ迷う惨めな狂乱の態の「王」の姿に集約されている。彼が狂気に至る過程に、ゴネリル、リーガン、コーディリアの3姉妹、忠臣ケント、グロスターの嫡子エドガー、道化の誰もが不可欠であるが、その中でも絶対必要不可欠な存在は道化において他にいないだろう。シェイクスピアは『リア王』執筆に際し、直接的間接的に7つの作品に影響を受けたと考えられており、その中で最も影響が強い作品が作者不詳の *The True Chronicle History of King Leir*（以下『原リア』と略称）である。¹『リア王』と『原リア』の間にはいくつかの相違点があるが、その中で注目したい点は、道化またはそれに代わる人物が『原リア』には存在しないということである。²リアの道化は、シェイクスピアの創造物なのである。

それでは、なぜシェイクスピアは道化を舞台に上げたのか。独創性を出すためだろうか。それはあるかもしれない。喜劇の道化のように笑いを招くためだろうか。確かに、鈴やロバの耳や羽などで飾り立てられた帽子を被り、まだら模様の服を着て登場する道化の姿は、痛ましくも愚かな悲劇の中にちょっとした笑いを起こすかもしれない。しかし、何よりも、分別、理性、自制心を失っていく「王」と滑稽であるべき道化の姿との対比によって、リアの愚かさ、狂気の悲劇がよりはっきりと浮彫りになってくることに道化の登場の意図と意義があるのではないだろうか。本稿では、道化なくしてリア

の狂気は理解できないという立場で、道化の言葉に注目しながら、リアの狂気への転落とその陰の立役者とも言うべき道化の在り方について考察していきたい。

I 愚行を犯す王、リア

リアの悲劇の始まりは娘達に愛情テストを課したことであるが、その根本にあるのはリアの愚かさである。

FOOL Yes, indeed, thou wouldst make a good fool.

LEAR To take't again perforce. Monster ingratitude!

FOOL If thou wert my fool, uncle, I'd have thee beaten for
being old before thy time.

LEAR How's that?

FOOL Thou shouldst not have been old till thou hadst been
wise. (1.5.31-36) ³

宮廷において道化は主に対する無礼講を特権的に許された存在であった。⁴ 道化が鞭打たれるのはその特権を超えた振舞をしたときであるから、リアが知恵を得る前に老いてしまったが故に鞭を浴びるということは、それが道化の判断を誤ったが故の越権行為と同様に、王であつても許されるべきでない愚かな行為だということを示唆している。「賢くなる前に老いた」リアは、一国の王であり、国家の中心に位置する人物だ。秩序の中核であるはずの王自ら、時期尚早に実権を捨て、国家の中核を引き抜き、挙句の果てにその穴に地獄の邪悪と悪魔(“Darkness and devils” (1.4.207))を導いた。結果として、国家の秩序を崩壊させ混沌を招いたのである。⁵ それは愚行と呼ばず何と呼ぶのだろうか。

リアが“wise”でない一つの側面は他者認識の甘さにある。末娘コーディリアと忠臣ケントの真の愛や忠誠心から生じる正直な言葉を悪と見做し、食欲で狡賢いゴネリル、リーガンを善と思いこむ(1幕1場)。このリアの過ち

は道化によってしばしば言及されるところである。⁶

The hedge-sparrow fed the cuckoo so long,
That it's had it head bit off by it young.
So out went the candle, and we were left darkling.
(1.4.175-177)

道化は、長く育てたカッコウの雛に頭を食切られるスズメにリアを例えることで、その愚かさを揶揄し、悪を善に、善を悪に見誤った先には聞かないことを、道化らしくおどけた調子で伝えている。

秩序の崩壊は、直接的に他者認識の甘さに拠るところが多いが、それだけでは悲劇を悲劇たらしめるには不十分と言わざるを得ない。なぜなら、飽く迄他者の認識は、他者を自分の意識の中に位置付けるためのものであり、認識する側から認識される側へと外に向かう行為である。観客の心に悲劇を感じさせるには、秩序の崩壊や他者に対するリアの愚かさだけではなく、その裏で苦悩するリアの姿が必要である。悲劇の要素である苦悩や悲哀、良心の呵責という内面的葛藤は、自分自身との深い対峙によって初めて生じる、あるいは認知されるのではないだろうか。外側に向けていたベクトルを内側に向けるのである。本来、自己認識自体が自分自身との対峙の産物であるが、その甘さの結果が時に命取り、悲劇的要素となり得るのである。この自己認識の甘さこそが、リアが“wise”でないもう一つの側面である。さらに、ベクトルが逆方向の他者認識も、実際には、一つの枠組みの中で自分自身の位置と相対的に照らし合わせることによって決定されるため、究極的には自己認識に拠ると言える。不十分、不正確な自己認識が、誤った他者認識を招くのである。このように考えると、リアの悲劇の原因＝リアを狂気に陥れたリア自身の愚かさ＝自己認識の甘さという図式が出来上がってくる。

II リアの自己認識とその崩壊

悲劇の原因＝リアの愚かさ＝自己認識の甘さという図式に、さらに「＝自

己認識と他者によるリア認識の差異が見えなかった」という内容を加えることができる。それでは、リアは自分をどのように認識しているのだろうか。リアが思うリア像は、不可侵の絶対的な存在の「君主リア」である。

[...]and with strained pride

To come betwixt our sentence and our power,
Which nor our nature nor our place can bear,
Our potency mad good, take thy reward.

[.....]

if on the tenth day following

Thy banished trunk be found in our dominions,
The moment is thy death. (1.1.163-172)

コーディリアを追放し、ゴネリル、リーガンに王としての全権を与えようとするリアを戒めるケントに対するリアの言葉には、自分に齒向かう者には容赦しない絶対君主リアの姿がはっきり写し出されている。

この認識は、王権を譲渡するまでは自己と他者の間で一致していたであろう。しかし、一度権限を手放せば、他者、特にありとあらゆる権限を譲り受けたゴネリル、リーガンにとって、リアは今までのような実質的な権力を持った絶対的君主ではない。なぜなら、国家という社会の枠組みの中で、彼女たちがリアに代わって新たに実質的な権限を手にした絶対的な存在になるからである。実権を放棄したリアが持つのは、彼の言葉通り王の名とそれに付随するもののみである：

I do invest you jointly with my power,
Pre-eminence, and all the large effects
That troop with majesty.

[.....]

only we shall retain

The name and all th'addition to a king: the sway

Revenue, execution of the rest,
Beloved sons, be yours; which to confirm,
This coronet part between you. (1.1.124-133)

“th’addition to a king” とは、恐らく榮譽や敬意、尊厳などの実態のないものだと思われる。けれども、先に引用したケントへの追放命令から推察できるように、権限の譲渡後にもリアは権力を行使している。「王」という名とその名を持つ榮譽だけでも権限行使力が備わっているかのようなリアの行為と言動は、ゴネリル、リーガンにとっても、老齢や気まぐれ (“the infirmity of his age” (1.1.284)、 “the unruly waywardness” (1.1.289)) に原因の一端を見出して、十分に危惧するところである (“If our father carry / of authority with such disposition as he bears, this last surrender / of his will out offend us” (1.1.294-296))。7 実際には、絶対性とは現実的な効力に伴うものであり、王は誰よりも強大な権力を持っているから、その名も他者に対して有効であり得る。しかし、王の「名」と「権力」を同時に持ち続けていたリアは、「君主リア」という認識に盲目的で疑うこともせず、退位という権力放棄によって、自己認識と他者によるリア認識の間にどのような差異が生じるか考えなかった。あるいは、王として生きてきたリアには考える必要性がなかったのかもしれない。ゴネリルに冷遇されて初めて、自分が最早「君主リア」ではないと知り、王としてのアイデンティティを失う。それはリアにとって自分の中核を失うことを意味する。国家の秩序崩壊と同じように、リアの内部でも中核の喪失による秩序崩壊が起こる。8 だからこそ、リアは自分が誰かを問いかけずにはいられない：

LEAR Does any here know me? This is not Lear:

Does Lear walk thus? speak thus? Where are his
eyes?

Either his notion weakens, his discernings
Are lethargied — Ha! Waking? ’Tis not so!
Who is it that can tell me who I am?

FOOL Lear's shadow. (1.4.185-190)

自分だと思っていた自分がいない。リアの問い掛けに対する道化の答えは“Lear's shadow” (1.4.190)である。この場面に関しては次の章で考察したい。

さてゴネリルの冷遇を受け王たる自分を見失いかけのリアは、リーガンに“the offices of nature”、“bond of childhood”、“effect of courtesy”、“dues to gratitude” (2.4.170-174)など、王への敬意だけでなく、親子の絆も求める。そこにはリアの一抹の弱さや心許なさが表れているようだ。そんなリアに対し、すでにゴネリルと話が通じているリーガンの態度はけんもほろろである。彼女達はリアを“my lord”、“father”と呼びはするが、実際には“the old man”としか見做なしていない。王としてのアイデンティティを失い、父としてのアイデンティティも失い、遂に行き場をなくしたリアは嵐の荒野をさ迷うしかない（3幕）。かくして、千里眼の如き道化の目に写し出されたように、娘に食べ物にされたリアは、アイデンティティの喪失、すなわち自己認識の崩壊という内部崩壊により、闇の中に落ちていくのである。

III 道化という真実

では、悲劇の陰の立役者である道化は、自己崩壊に陥るリアとどのように関わっていたのかだろうか。前述したように、道化は何を言っても行っても特権的に許される存在であり、それは、ケントの例が間接的に示すところでもある。またリアによっても明示されることだ。

FOOL [.]

Prithee, nuncle, keep a schoolmaster that can teach thy
fool to lie. I would fain learn to lie.

LEAR And you lie, sirrah, we'll have you whipped.
(1.4.133-141)

ここでは売り言葉に買い言葉のニュアンスを伴い「嘘をつくな」と脅すリアだが、後に彼は真実を見ることが必要になる。道化に与えられた役割とは真実を彼の主に示すことである。そして、リアを道化呼ばわりする道化が示す真実は、リアの無分別に起因することばかりであるが、その中でもリアの狂気を考える上で非常に注目に値すると思われる台詞は以下のものである。

Thou wast a pretty fellow when thou hadst no need to care
for her frowning; now thou art an O without a figure. I am
better than thou art now; I am a fool, thou art nothing.
[.....]
That's shelled peascod. (1.4.152-159)

“an O without a figure”、“shelled peascod”とは、外殻はあるが中身がない状態を指しており、それはまさに、王という「名」（外殻）は持っていないが、その「実権」（中身）を持たぬリアを的確に表現している。「あんたはなんでもないが、俺は道化だ」と言う道化は、道化という存在意義を持っているが、リアは空っぽなのである。道化は自己認識が崩壊し、道化でも持っている存在意義を持たぬ（あるいは見失ったリアの姿をリア自身に示そうとしている）。

この空っぽのリアは＜リアの自己認識と崩壊＞で引用したリアの“Who is it that can tell me who I am?” (1.4.185)と類似、呼応する。空っぽの中に、自分を確定する源があるはずはない。問いに対する道化の“Lear's shadow.” (1.4.190)であるが、この答は二重の意味を持つ。つまり、① ‘Lear's shadow can tell who you are.’ と、② ‘You are Lear's shadow.’ である。「リアの影」は、①の場合であれば失墜したリア自身（①－１）と、影の如くリアに付き従う道化（①－２）とも解釈できる。②の場合であればリア自身を指すだろう。⁹

そもそも影とは光があって初めてできるものである。退位するまでリアはまさに「王」という光そのものであったが、光（権威）が他者に移動したこ

とにより、リアは光に曝され影が誕生する。「光」を失う＝「絶対君主のリア」を失うこと、つまり今までの自己意識が崩壊することであるが、影の誕生により、光を失ったリアを影となったリア（自己喪失のリア）が見つめ直すことができる。それは、今のリア（影のリア）が、現在（影）と過去（光）の自分と同時的に向き合うことである。このように考えると、「俺が誰なのか言える者は誰だ？」というリアの問いに、“Lear’s shadow can tell you are Lear’s shadow.”（①－1かつ②）という答が出てくる。さらにリアを「0」（1.4.153）に例えた道化の言葉も巻き込むなら、“you”は“Lear who are nothing”と解釈することも可能である。「リアの影が、空っぽのあんたがリアの影だと言えるんだ」である。

影と光の自分と向き合うということは、結局のところ真実に目を向けることである。そして、真実と直面するには道化が不可欠なのである。なぜなら、道化は誰よりも真実を見抜ける存在だからだ。そして、それを伝えることができる立場にいるからである。「あんたがリアの影だと言えるのは道化だよ」という①－2かつ②の解釈である。歌や軽口にのせてリアにメッセージを発する道化の姿は、多少誇張表現かもしれないが、まるで全てを見透かした上で悪ふざけをする全知の存在のようである。¹⁰総合的に見ると、自分は誰だと問うリアは、真実を踏まえて改めて自己認識をするしかなく、それを助けるために、預言者のように真実を見抜くことができる道化が「影」のようにリアの傍近くにいる必要があるのだ。

IV 消える道化

リアにとって真実を知ること、アイデンティティの模索、自己の再構築への第一歩でもあり、そうであるなら、道化は本来リアの愚行を戒め、リア再建に手を貸す位置にいて、そこを離れるべきではない。しかしながら、そのような重要な役割を持っているにもかかわらず、道化は3幕6場以降、狂気の極みに至ったリアの傍からも舞台からも消えてしまう。なぜいなくなってしまうのか。

リアが知る真実は、コーディリアへの無慈悲な仕打ちを含めた自らの愚行

や、ゴネリル、リーガンの残酷さであり、リアにとっては気が狂うほどに耐え難いものだった。その耐え難さは荒れ狂う荒野で悪娘二人を呪うだけでなく、以下の引用にも見られるように、そのような娘を世に生み出した我が身をも呪うほどである。

Death, traitor! Nothing could have subdued nature
To such a lowness but his unkind daughters.
Is it the fashion that discarded fathers
Should have thus little mercy on their flesh?
Judicious punishment: 'twas this flesh begot
Those pelican daughters.(3.4.65-70)

ペリカンは自分の肉と血を餌として雛に与えることがあったと言われ、その雛は親に対する残酷さで知られていた。この“his unkind daughters”の“his”はエドガーが扮した乞食トム¹¹を指すが、“Those pelican daughters”は、リアの意識の中で、明らかにゴネリルとリーガンを意味している。荒野に飛び出した時点ですでに狂いかけていたリアは、トムの惨めな様子の理由を無慈悲な娘に見出し、トムの姿に、ゴネリルとリーガンに貶められた自分自身の姿を見、その身を呪うのである。狂ったふりのエドガーを“philosopher”(3.4.138, 156,160)と呼び、共感、心頭する様子には、もはや分別も耐え難い真実に耐えるだけの忍耐力もないリアの姿が伺える。エドガーの演技の狂気に引き摺られ完全に狂乱してしまうのである。リアにとって、もはや人間そのものが愚かな存在にしか思えず、王であった自分もその愚かな存在の一人で、ただの道化に過ぎないと狂気の最中に悟る。

When we are born, we cry that we are come
To this great stage of fools. (4.5.174-175)
No rescue? What, a prisoner? I am even
The natural fool of fortune. (4.5.18182-183)

リアが世界は「阿呆の大舞台」“this great stage of fools”に過ぎないと言うとき、すでに道化の姿はリアの傍になく、代わりに乞食トムがいる。道化の役割は、阿呆を演じるエドガーに引き継がれたのである。そもそも、道化の役割は真実をリアに見せること、「ものを視る目」を与えることであった。それはリアを狂気に陥らせるためではなく、アイデンティティを再構築させるためであったが、結果的にはリアの正気の心を失わせてしまう。¹²けれども、荒野でゴネリルとリーガンを裁く模擬裁判を行うほど完全に狂乱したリアは、十分耐え難い真実を理解した結果と言えないだろうか。そして、それが正しいかどうかはともかく、「自分は道化である」という一つの自己認識を獲得したのではないだろうか。変装したエドガーの正体を見破れなくても、善と悪を見極める、物事を「視る目」を得たのではないだろうか。

My wits begin to turn.

Come on, my boy. How dost, my boy? Art cold?

[.....]

Poor fool and knave, I have one part in my heart

That's sorry yet for thee. (3.2.65-70)

これ以降、リアは道化を気遣う。視る目がついたからこそ、他人の痛みも知覚することができ気遣うことができるようになったのである。そして道化の役割は終わったのである。狂うほどに真実が見える領域までリアを連れてきた時、道化に他に語るべきことはない。かくして道化は舞台から姿を消す。

結

道化が舞台から消えた後、リアはコーディリアと再会を果たし、娘の優しい言葉に間の幸せを味わうが、エドマンドの策略により、コーディリアは暗殺される。その時のリアの悲痛な叫びと、狂乱と悲しみの果ての死は悲劇にふさわしいものである。けれども、その最後の瞬間の高まりは、中盤の盛り上がりがあってこそだろう。道化がいなければ、リアは狂気に陥るほどに真

実に向き合うことはなく、冒頭から中盤までの悲劇的な高まりはなかった。道化なくしてリアの狂気は理解できないが、それより以前にリアの狂気が存在し得ないのである。道化とリア、この二人は作品中の他の誰よりも、どんな組合せよりも内面的に影響する深い関係にあるのである。

註

1. その他の6作品は John Higgins, *Mirror for Magistrates* (1574), Raphael Holinshed, *Chronicles of England* (1577), Edmund Spenser, *The Faerie Queene*(1590), Philip Sidney, *Arcadia* (1590), Samuel Harsnet, *A Declaration of Egregious Popish Impostures* (1603), Michel de Montaigne, *Essays* (1603) である。
2. シェイクスピア『リア王』、福田恆存訳（東京：新潮文庫、1967）解題参照。「愛のない結婚はしないという末娘コーデラを結婚させるために、姉に劣らず父を愛しているなら、父の選んだ相手と結婚しろ、という『リア王』よりは自然な愛情テストの動機。『原リア』の王はシェイクスピアのリア王よりも常識的で、悲運にも感情しやすいが、その分悲劇的人物としての力に欠ける。娘二人に追放されるが、復位し、コーデラも死なない。『原リア』には道化の影がない。グロスター物語もなく、ケントにあたるペリラストという人物も追放されない。」187-188.
3. William Shakespeare, *The Tragedy of King Lear*, Ed. Jay L. Halio (Cambridge: Cambridge UP, 1992) 本稿におけるシェイクスピアからの引用はこの版による。括弧内の数字は行数を示す。
4. 1幕4場のゴネリルの台詞の中に、“your all-licensed fool” (160)という、道化の特権的地位を表わす言葉がある。
5. 高橋康也、「シェイクスピア」『道化の文学 ルネサンスの栄光』（東京：中公新書、1977）162.
6. Oscar James Campbell, *Wise Fools in Shakespeare* (Liverpool: Liverpool UP, 1974) 11.
7. Quarto(1608)では1幕3場に以下のようなゴネリルの言葉が見受けられる。

[.....] Idel old man,

That still would manage those authorities
That he hath given away. Now by my life
Old fools are babes again and must be used
With checks as flatteries, when they are seen abused.

8. ルネサンスの思想的背景をなすネオ・プラトニズムは、宇宙を一つの巨大な調和的生命体（「大宇宙」）と見、魂と肉体からなる人間を「小宇宙」として、「大宇宙」と「小宇宙」は対応するものと考えたとされる。青山誠子「ルネサンスにおける自己認識と『リア王』」「シェイクスピアの演劇的風土」239、日本シェイクスピア協会編（東京：研究社、1977）

『リア王』もこの思想に少なからず影響はされていると思われる。

9. 高橋氏、166 参照

10. Enid Welsford, 'The Fool in King Lear', *Shakespeare King Lear A Casebook*, Ed. Frank Kermode, (London: Macmillan 1969) 147.

11. グロスターの嫡男エドガーは、弟（庶子）のエドモンドの策略により、父にあらぬ疑いをかけられ追われる身である。

12. Campbell, 65.